琉球大学学術リポジトリ
University of the Ryukyus Repository

Title	戦後沖縄移民と文化形成 : 海外亡命士族の軌跡
Author(s)	上里, 賢一
Citation	アメリカ統治と戦後沖縄 : 異文化の衝撃: 59-74
Issue Date	2001-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1211
Rights	

国立大学法人
琉球大学
University of the Ryukyus

戦後沖縄移民と文化形成

―海外亡命士族の軌跡―

上　里　賢　一

はじめに

「地上に二つの沖縄がある。その一つがハワイである」。ハワイに生きるウチナーンチュの姿を見ると、この俚諺がけっして大袈裟なものでないことが実感できる。

数は少ないが、９０歳を越えてなお元気な一世の方は、自分の生まれ島の方言を話すことができるし、島の生活と文化を体現している。それは、遠い過去の記憶としてだけではなく、みずからの存在の証を確認する大切な要素として、日々の生活の中で繰り返し咀嚼されて、体の奥深くに沈着し織り込まれている。一世の方に向かい合った時感じるほのぼのとした温かさは、現在の沖縄が失ってしまった遠い昔の純朴さと誠実さが、飾りのない姿のまま現実化するからに他ならない。

ハワイの沖縄系移民は、すでに三世、四世の時代を迎えている。ウチナー口を話せる三世、四世もいるが、当然の事ながら英語しか話せない者が圧倒的に多い。それでいて、沖縄に対する愛着は一様に強いものがある。ウチナーンチュ、エイサー、サーターアンダギー、オキナワそば、テビチ等はハワイの共通語のようになっており、市民権を得ている。琉球民謡、舞踊の教室もたくさんあり、空手の教習所もある。沖縄の文化が根づいていると感じさせられる。

１９０１年に２４人の沖縄県人が初めて移住して以来、百年の歳月が流れている。沖縄からの移民は、そのほとんどが農家であり、砂糖キビやパインのプランテーションで働く労働者であった。沖縄の慢性的な貧困にあえぐ農民が、新しい天地での成功を夢見て太平洋の海原を越えたのである。

これらの移民の中には、明治の「琉球処分」によって俸禄を失い田舎に生活の基盤を求めた（いわゆるヤードゥイ）旧琉球王国の士族階層に属する人々も多数存在する。その中でも旧琉球王国の役人として、国家の中枢にいた人物や王家の系譜につながる人々が存在しており注目される。これらの人々は、移民の大半を占める農民層とは、その出自が違うばかりでなく、移民先における状況も異なっていたようである。しかし、ハワイ移民に関する研究は、移民の大半を占める農民層の動向を探ることに論点が集中せざるを得ない状況にあり、移民の沖縄における階層の差異に注目して、それが移民先ではどのように反映し、また反映しなかったのか、という事については触れられることがない。

ハワイ移民の中に見える旧琉球士族層は、膨大な数にのぼるので、その全体の動向についての調査は、今後の課題としなければならない。ここでは、「琉球処分」当時、国王の側近、およびその周辺で活躍した家に限定して２～３の事例を紹介し、今後の研究の糸口としたい。

現在、ハワイの寺院に行くと、祀る子孫のない、あるいは子孫はいても宗教的な事情などから、沖縄の祖先崇拝の象徴である「ガンソ」（位牌）を安置している所がある。寺院に預けてあるのはまだしも、場合によっては捨ててしまったり、親が亡くなった時、一緒に葬ったりすることもある

という。これらの中には、農民の家のものもあもあれば、由緒ある家柄のものもある。そのどちらも、移民研究の資料としては大切である。なかには、移民研究の資料としてばかりではなく、沖縄の近現代史の生きた資料として重要なものもある。

時代とともに移り変わるのは、なにもハワイの人々や事象ばかりではない。そのことを嘆いていても仕方がない。それよりも、このまま放置すれば歴史の闇の中に永遠に消えてしまうかも知れない人物や事象に光を当て、少しでも書き留めておくことが大切である。

1．林世功の蔵書印と『琉球詠詩』

ハワイ大学ホーレー文庫は、日本関係文献を所蔵する国外の機関として有名な文庫である。その中にある沖縄関係文献は、その学術的価値の重要性から、沖縄はもちろん内外の研究者の注目を集めてきた。１９６０年代の初頭には、当時の沖縄研究のリーダーであった仲原善忠・比嘉春潮氏が、ハワイ大学の招請を受けて、この文庫中の沖縄（琉球）関係資料の整理に当たり、引き続き仲宗根政善氏が研究のため訪れている。[注1]

由緒あるこの文庫の全体に直接触れ、自己の専門領域に関わる文献資料については、時間の許すかぎり詳しく見てみたいというのは、沖縄（琉球）研究に関わる者なら誰もが持つ願いである。

この文庫の複製本は、法政大学沖縄文化研究所にあり、琉球大学付属図書館にも沖縄（琉球）関係の資料の一部がある。それらの大半は和文であるが、中国文献、日本文献の中に少数ではあるが漢詩文を含む漢籍関係資料がある。

たとえば、江戸時代の薩摩を代表する儒学者南浦文之の『南浦文集』、『襟帯集』、江戸時代（文化三年）の江戸上り使節団の久志親雲上と交流のあった牧野履（豊前の儒者）の『琉球百韻』、琉球の碩儒程順則の『六諭衍義』、同『雪堂燕遊草』、豊川親方正英の『六諭衍義和解』、橋本海関『古琉球吟』、久保天随『琉球遊草』、阮宣詔・鄭学楷・向克秀・東国興の『琉球詩録』、同『琉球詩課』、林世功・林世忠の『琉球詩録』、同『琉球詩課』、同『琉球詩課』（写本）、鄭元偉・魏学賢・尚元魯の『東遊草』、楊文鳳『琉館筆潭』、『琉球人詩歌集』（写本）、『琉球詠詩』（写本）、王士禎の『紀琉球入太学始末』、潘相の『琉球入学見聞』、陳第『東蕃記』、黄景福『中山見聞辨異』などの他に、徐葆光の『中山伝信録』をはじめとする歴代冊封使録がある。[注2]

これらのホーレー文庫所蔵漢籍については、稿を改めて述べることにして、ここでは、『琉球詠詩』という写本について、林世功との関係について述べておきたい。この詩文集は、琉球大学にもその複製本があり、その内容は、漢詩文研究者の間では比較的広く知られているものである。

『琉球詠詩』については、調査・整理に当たった沖縄側の研究者（筆跡からして仲原善忠氏の可能性が大きい）による、次のような簡単な調査メモがある。「尚温王之（ママ）冊封使、趙文楷、李鼎元、寄塵等を初め、その前後に琉球に来た支那詩人及琉球の詩人の佳作をあつめてある。編集の年月は不明であるが、鄭元偉・魏学源の作があるから天保１４年（１８４３）以後の編集である」

このメモにもある通り、内容は冊封使や琉球の詩人の作品の中から、編集した人物の意に合致したものを選んで写したものである。題箋、奥付ともになく、表紙（茶色）に白い題箋があるが、紙の痛みはないものの、文字はもともとあったのかさえ不明なくらい全く見えない。書名は『琉球詠詩』となっているが、現在は見えなくなっている題箋に書かれていたものか、後に誰かが付けたものか、現在のところ不明である。

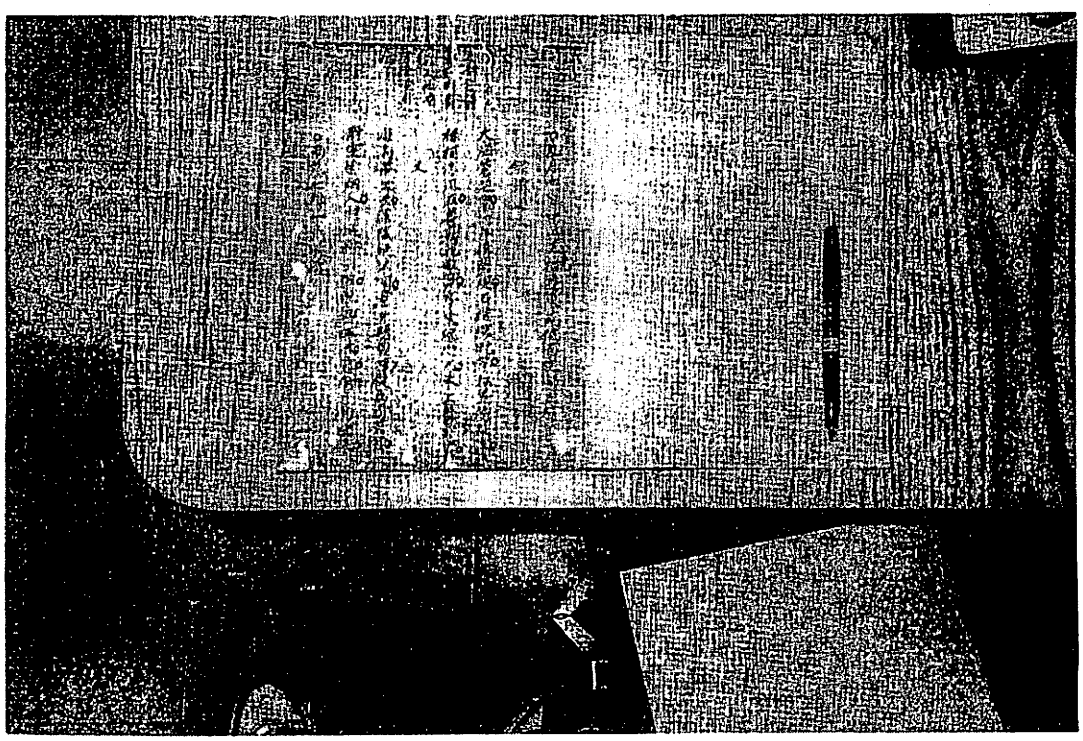
本文は、丁寧に裏打ちされている。本文の最初のページは、１８００年に渡来した冊封使趙文楷の「九月四日中山王招遊東苑値雨晩歸　五律二首　録請誨正」いう題の作品から始まっており、詩題と作品の間の空白部分に、「林世功印」という縦と横がそれぞれ１．５センチの陰印と、林世功の号である「子叙」という縦１．３センチ横１．４センチの陽印が上下に並べて押されている。

林世功の所蔵にかかる資料は、今のところこの詩集以外には確認されていない。沖縄を含む日本国内の図書館や資料室などでは、管見のかぎり見たことがない。林世功の研究にとってはもちろん、琉球漢詩文の研究においても、この蔵書印を確認できたことは、大きな意味があると言える。

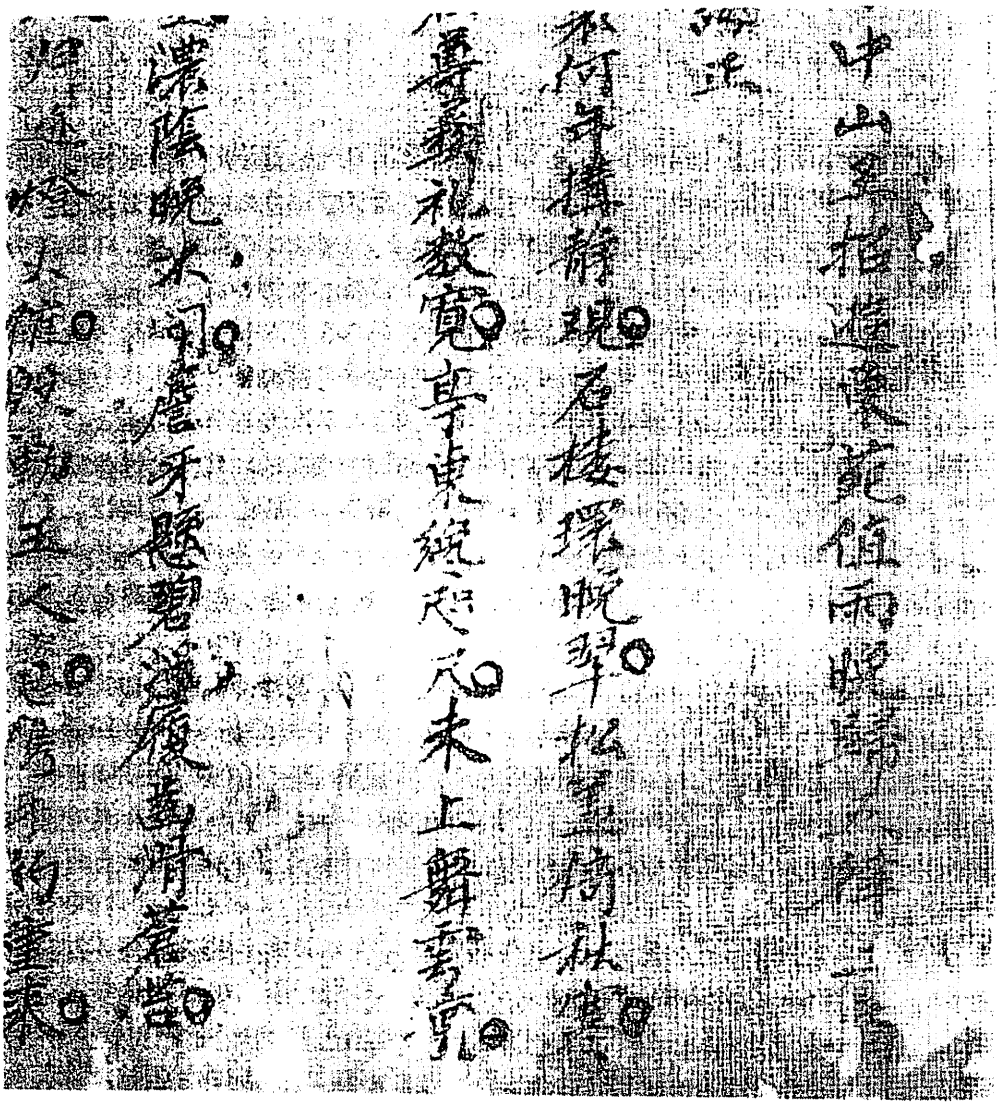
また、この写本が奥付けや抄写した人物の署名を欠いているために、書誌的に重要な情報であるその成立と筆者の特定が出来ないという状態にある。写本の場合、蔵書印が押してある時は、その人物自身による写しであることが多いことを考慮すると、この写本が林世功自身の手択本である可能性も否定できない。『琉球詠詩』については、今後書誌的な研究を慎重に進める必要がある、と言える。

ホーレー文庫中の琉球と関係のある漢籍資料については、複写したものを持っているので、これと原資料とを付け合わせて、コピーでは黒く映っている朱点や圏点、所蔵者による書き入れ等をチェックすることが、今回の訪問の最大の目的であった。書庫に通されて程順則の『雪堂燕遊草』、楊文鳳の『四知堂詩稿』、林世功・林世忠の『琉球詩録』、『琉球詩課』等が並んでいる書架を見て感慨を覚えた。最初に林世功・林世忠の『琉球詩課』を見せてもらい、その次に『琉球詠詩』をチェックした。

この蔵書印に出会った時、実際に原資料に当たることの重要性を改めて強く思い知らされた。『琉球詠詩』については、琉球大学付属図書館にあるホーレー文庫のコピーを利用しており、その内容については熟知しているつもりだった。ところが、琉球大学のコピーでは、冒頭のページにある蔵書印は判読が困難で、その所蔵者を特定できないままになっていた。



▲写真１　『琉球詠詩』の冒頭のページ



◀写真2　『琉球詠詩』の冒頭に見える「林世功」(上)・「子叙」(下)の蔵書印

実際にハワイに来て、すでに１９６０年代に調査した先学の記録メモを、なにげなく読んで、先に紹介した簡潔なメモ（Ｂ６版のカードを使っている）を裏がえした時、電気に打たれたような興奮を覚えた。表から続く調査者のメモの後に、明らかにメモの調査者の筆跡とは違う人の筆で「首頁有『林世功』『子叙』両印、或係林所揖録之詩集」という記録があったからだ。

わくわくしながら冒頭のページをめくったのは言うまでもない。そこには、薄くはなっているが、朱色の印鑑が押してあった。思いもよらない林世功との出会いであった。[写真１、２参照]

２．林世功と清国へ渡った船頭

この共同研究の研究分担者となって、急いで沖縄とハワイとの関係について書かれた文献を読んでみた。その中の一つに崎原貢著『がじまるの集い――沖縄系ハワイ移民先達の話集』がある。注3

ハワイに生きる移民の中から二十五人の人物を選び、移民の動機やハワイに来てからの生活の中で、特に印象に残っていること等について自由に書いたもの（あるいは、その経験を聞いて筆記したもの）である。いずれもその人しか語ることの出来ない重い経験ばかりであり、ハワイの沖縄系移民を知るうえで貴重な体験集となっている。

その中に１７番目に登場している長嶺将真さんと、２０番目に登場する幸地朝則さんの項目は、特に印象深いものであった。どちらも崎原貢氏が筆記したものである。話によると、二人の先祖は、

その祖父の時代に強い絆で繋がっていた。そして、林世功も長嶺、幸地の先祖と同志的な関係にあった。

崎原貢氏の筆記の内容をもとにして、長嶺さんと幸地さんの経歴を簡単に要約しておこう。

長嶺将真さんは、１９０５年に当時の名護町許田の湖辺底で生まれている。その先祖は那覇泊村の士族であった。食えなくなって許田の湖辺底で開墾して住みついた「居留人」だったという。農業だけでは食えなくて、山原船で国頭や久米島から薪や木材を那覇へ運送していた。そして稀には唐旅にも出かけた。

将真さんの父親の将長さんも、唐旅に出ており、唐旅から帰ってくると、たいてい甕や壺を沢山もってきて、急いで人目につかない砂浜に埋めておき、ゆっくり機を見て売ったという。ところが、将真さんの幼い頃、持船が久米島近海で難破して、無一文どころか借金までしょい込み、その後はあせればあせるほどうまくいかなかった。

将真さんは、１９２２年１２月、１７歳の時にハワイへ渡った。ハワイでは養豚の手伝い、パインの植えつけ、ホテルのウェイター、汽船のスチュワード、タクシーの運転手等の職を転々とした後、沖縄県人レストラン経営の大先輩の上原正義さんと出会い、そのレストランで働く。その後独立してカフェー・フラミンゴを開店すると、カピラオニ・フラミンゴ、フラミンゴ・チャック等６つのチエイン店を展開するまでになる。

長嶺さんは移民の動機について、次のように語っている。「家族両親に姉二人、兄二人で、私は三男で末子だった。長兄の将明は長じて海軍に入り、特務曹長にまで昇進し、妻を佐賀からもらい、退役後佐賀県の高岸村という所で製米所を経営していた。次兄の将栄もやはり海の男で、山原船を一艘もっていた。長姉のカマドは大嶺会六と結婚し、サイパン島に行ったし、次姉のカメは野原某に嫁ぎ、大東島に行った。長嶺家では男はみんな海に出、女も結婚すると他郷に行き、湖辺底にのこる者はいなかった。それで、私も大きくなったら、村を飛び出すのは当然だと思っていた。

ところで、その頃長兄の将明が軍艦出雲か八雲乗組で、ハワイを訪問した。従兄弟の長嶺将兵と将良もハワイに移民していた。そこへもう一人の従兄弟の長嶺永得というのが、ハワイ島オラアで砂糖黍作りで一儲けして帰ってきた。彼の話を聞くとハワイに行きたくなった。しかし何よりも強く印象に残ったのは、１０ドル金貨だった。燦然と輝く黄金を見ていると、矢もたてもたまらなくなった」（崎原貢『がじまるの集い』１３３～１３４ページ）。

こうして、先に見たように１７歳の時、知人から旅費を借りて、ハワイへ渡った。その人生は、けっして平坦なものではなかった。苦労を重ねて今日を築いたことが、行間にあふれている。そのためだろう、「ウエイターから６つのレストラン・チェインの社長になった今日でも、長嶺さんは豪華な社長室で、やわらかい安楽椅子にふんぞりかえって、部下に命令を下すという事はない。自ら客にコーヒーをついだりする陣頭指揮の連続である」（崎原『前掲書』１３９～１４０ページ）。

その長嶺将真さんの祖父と、幸地朝則さんの祖父、そして林世功は、深い因縁で結ばれていた。幸地朝則さんの祖父の幸地朝常（向徳宏）は、「名門でもあり学問も抜群だったので、若い頃は出世街道を順調に歩み、明治維新の直前には、琉球王府の御物奉行という財政担当長官に就任している。真面目な堅い人で、尚泰王の信任もあつく、王の妹を妻にもらった。破格の名誉であり、益々忠勤をはげんだであろう」（崎原『前掲書』１５２ページ）、と言われた人物であった。

琉球王国は、１８７２年（明治５年）に琉球藩となり、尚泰は華族に列せられる。その前年には宮古島の貢納船が台湾に漂着し、５４人が殺害される事件が起こり、１８７４年（明治７年）には、

琉球島民殺害を理由に台湾出兵。７５年松田道之が来琉し、藩王に御達書して「冊封の差止め、清国への進貢使、慶嘉使の派遣差止め、福州琉球館の廃止、明治年号を使用すること、日本への留学生派遣の事」等が伝えられた。明治政府の武断的な措置に抗議して、琉球国王は、幸地朝常（向徳宏）、林世功、蔡大鼎らを密かに清国に派遣する。「脱清人」[注4] と呼ばれる明治政府に対する不服従、抵抗行動の最初となった。

幸地親方朝常らの琉球脱出の時、船頭として加わったのが、長嶺将真さんの祖父だったという。『沖縄県史』をはじめ、「脱清人」関係資料には、その名前を確認できない。

崎原貢『がじまるの集い』の幸地朝則氏の項目に次のような記述がある。長さを厭わず紹介しておこう。

「その後、内務大丞松田道之が沖縄に来て、直談判を開始すると、いよいよ切羽つまった琉球側では、中国の応援を仰ぐことにし、その使節を尚泰王が信任している幸地親方に決定したが中国への渡航を日本の内務省が許可しないのはわかりきっているので、祈願の為に伊平屋島へ行くと称して一八七七年三月本部間切から出帆して、そのまま福州へ密航した。ここで面白いのは、その時の船頭が現在ホノルル市でフラミンゴ・チャックワゴン・レストランを経営している長嶺将真さんの祖父だったということである。長嶺家は名護の許田に住し、代々船持ちだった。長嶺さんのお祖父さんは、福州にも行った経験のある船長だったから選ばれたのだろう。しかし幸地親方を福州に届けて帰ってくると、密航幇助罪という事になって、何カ月か刑務所にぶちこまれたらしい。幸地親方は北京に行き、いろいろ中国の要路の大官に働きかけたが徒労に終わった。その頃中国に脱走した親支派の人達を脱清人といい、たいていは何年か後、日清戦争で中国が頼りにならないとわかると帰ってきたが、幸地親方はとうとう帰らなかった。多分福建の琉球館にでも在留し、客死したものと推察される」（１５２ページ）。

この記述の中には、幸地親方らが「一八七七年三月本部間切から出帆し」と述べているが、実際はその前年の１８７６年１２月である。「脱清人明細表」という明治政府による取調べの記録[注5]には、林世功と長嶺船頭の名前は確認できない。林世功の場合は、その行動があまりにも衝撃的だったため、明治政府によって意識的に排除されたと思われるが、船頭の長嶺の名前が何故出ていないか、引き続き慎重に調べていく必要がある。一読してわかる通り、長嶺さんの話は具体的であり、信頼に足りるものである。「長嶺家は名護の許田に住し、代々船持ちだった。長嶺さんのお祖父さんは、福州にも行った経験のある船長だった」ということや、長嶺さんが、ハワイ移民の動機を語った中で述べている「次兄の将栄もやはり海の男で、山原船を一艘もっていた」という、長嶺家と海との関係、長嶺家と「唐旅」（中国へいくこと）との関係を考慮すると、将真さんの祖父が船頭として渡唐する可能性は十分ありうることだと思われる。

３．林世功の琉球救国運動とその歴史的意義

長嶺将真さんの語る、「脱清人」の船頭となって福州に渡った祖父に関することが、歴史的にどのような意義のあることかを考えるためにも、ここで林世功に触れておく必要がある。一緒に中国へ脱出した人物の中でもその行動と精神は突出しており、「脱清人」全体の中でも、その存在は衝撃的である。

林氏の家譜によれば、林世功の童名は思加那、字は春榜。道光２１年辛丑１２月２４日卯時生ま

れ。父は奕保、母は鄭氏。１８６５年（慶応元年）、２４歳の時官生科合格。６８年（明治元年）北京の国子監に官生となって入学。これまでに首里の国学で４年間、詩文官話の修得をしている。７４年（明治７年）北京より帰国、久米村文組主取となる。翌７５年（明治８年）国学師匠となり、世子（尚典）講師となる。３４歳であった。

ここまで見てくると、林世功の人生は順調に進んでおり、将来を約束され期待されていたことがわかる。国学師匠となり、尚典の講師となって、どちらかと言えば文官として役人の地歩を築きつつあったと見ることができる。

しかし、時代の荒波は彼の人生を狂わせることになった。その翌年彼は幸地親方朝常（向徳宏）、蔡大鼎（伊計親雲上）と共に王の密書を携えて琉球から脱出し清国へと旅立った。一行は先に進貢し、帰国する前に清国との断絶が言い渡されたため、そのまま福州に止まっていた毛精長（国頭親雲上盛乗）らと合流して、清国の要路に琉球国の復旧を図るべく精力的な嘆願要請活動を展開した。

しかし、彼らの嘆願活動は清国政府を動かすまでに至らず、あしかけ３年の歳月が流れてしまった。１８７９年（明治１２年）３月には、廃藩置県となった情報がもたらされ、もはや、福州琉球館でじっとしていることができず、林世功らは頭髪や服装を清国風に変えて、土地の通事（河口通事）謝維垣を案内役にして夜陰にまぎれて福州を小舟で出発し、北京を目指した。天津に上陸し、先に着いていた幸地親方らと合流した。彼らはここで、前アメリカ大統領グラントの提案により、日清両国の間で琉球を三つに分割して、奄美を日本に、先島を清国に、沖縄本島とその周辺の諸島を独立させる、という案が議論されており、間もなく合意しそうだという情報に接した。彼らはこれまでに、３０件に近い嘆願書を総理衙門、礼部、北洋大臣李鴻章、督弁福建軍務左宗棠ら宛に送っている。

その嘆願の多くは毛精長・蔡大鼎・林世功、及び向徳宏・蔡徳昌・向有徳らの共同によるものであった。しかし、琉球の分割案がすぐにも結論が出そうだという事を知った林世功は、総理衙門宛の嘆願書を一人で提出し、自ら生命を絶った。その時の嘆願書は、次のとおりである。注6

琉球国の陳情通事　林世功　謹しみて禀（ひん）し、一死を以て天恩を泣請し、迅（すみや）かに（国）主を救ひ国（土）を存せらるるを賜り、以て臣節を全ふせんが事の為にす。

窃（ひそかに）に、功、主辱しめられ国亡ぶに因り、已に客歳〔光緒五年〕九月、前の進貢正使耳目官・毛精長等に隨同し、改装して都〔北京〕に入り、疊次憲轅に葡叩し、号して救を賜はらんことを乞ひて各々案に在り。惟だ是れ、何の辨法を作すやは、尚いまだ諭示を蒙らざれば、昕夕焦灼し、寝饋倶に廃す。泣念すらく、功、主命を奉じ、閩に抵り〔危〕急を告げてより已に三年を歴る。図らずも、敝国惨（憯）として日（本）人の益々鴟張を肆にするに遭ふ。一は則ち宗社（廃）墟と成り、二は則ち国主・世子執（とら）われて東（京）へ行く。継いで、則ち百姓は其の毒虐を受く。皆、功が痛哭して救を請ふ能はざるに因りて致す所なり。已に死するも余罪あるに属す。顧みるに国主いまだ返らず、世子拘留せらるれば、なお恥を雪（そそ）ぎて以て生存を図らんと期し、いまだ敢て躯を捐（す）てて以て責を塞がざるなり。今、（北）京に晋みて守候し、又た一載（一年）を逾ゆるも、仍お復た未だ事を済す克はず。何を以て臣たらんや。計るに、惟だ死を以て王爺および大人に泣請するあるのみ。情に據りて具題するを俯准せられ、（北）京に駐まるの倭使〔日本国公使〕に伝召し、之に諭すに大義を以てし、之を威すに声霊を以てし、妥（ほどよく）よく籌辨を為し、我が君王を還さしめ、我が国都を復せしめられよ。以て臣節を全ふせしむれば、則ち功は死すと雖も憾（うらみ）みなし。謹しみて禀す。

光緒六年十月十八日〔１８８０年１１月２０日〕

死を賭けての請願と言うにしては、請願書の内容はあまりにも穏やかである。ほとばしるような激情、心中の煮えたぎる憂憤は極力抑えられている。とくに、清国に対しては、その姿勢を糾弾したり、抗議したりする言葉は見えない。お願いする相手に対する礼儀と言うものだろうが、自己の生命を犠牲にして訴え出ようとする青年の衝撃的な行動と、この文章の控え目な内容とのギャップはずいぶん大きなものがある。それがかえって、絶望と諦観の深さを反映しているとも言えそうだ。

「敝国惨（憺）として日（本）人の益々鴟張を肆にするに遭ふ。一は則ち宗社（廃）墟と成り、二は則ち国主・世子執われて東（京）へ行く。継いで、則ち百姓は其の毒虐を受く」という表現は、日本に対する強い抗議の声とみえるが、請願を繰り返しても、何ら有効な策を取らない清国に対しては、文面のどこにも、抗議や恨みがましい表現は見られない。ただ、国王の臣下たる身でありながら、その本分を十分には果たしていない自らを責めるばかりである。「功が痛哭して救を請ふ能はざるに因りて致す所なり。已に死するも余罪あるに属す」、「いまだ敢て躯を捐てて以て責を塞がざるなり」、「以て臣節を全ふせしむれば、則ち功は死すと雖も憾みなし」などの言葉はそのことを如実に表している。

西里喜行氏によれば、林世功はこの請願書を提出する二日前に、毛精長・蔡大鼎と連名で総理衙門あての請願書を出している。林世功がなぜ単独で決死の行動に出たのかについては、西里氏も明確な答えは示していない。ただ、この請願がなされた時には、琉球の問題についの日清間の交渉は妥結を見ており、琉球分割条約案も議定され、調印をまつばかりとなっていた。しかし、「清国内では、この条約の可否ををめぐって大論争が展開されていた」という。このような状況を背景にして、林世功の行動を見ると、それは「まさに琉球分割条約案を締結した日清両国政府に対する決死の抗議に外ならなかった」。

次に紹介する「辞世の詩」二首は、林世功について語る時たえず引用されてきたものであり、あまりにも有名な作品である。

しかし、その内容と表現を見ると、これも先の請願書と同じ精神的志向を示しており、琉球の処遇について、その土地の歴史と人々の意思に何ら配慮することなく、まるで白地図の上に線を引くがごとく二分割だ三分割だと勝手な議論をして、あろうことか、請願を繰り返している林世功らの行動を無視して分島案を議定してしまった日本と清国に対して、何故もっとストレートに強い抗議の声を発しなかったのだろうか。其の一には「国を憂い家を思いて已に五年／一死猶お期す　社稷の存するを」と、当時の状況の一端と決意を表明しているが、表面的には、林世功の個人的な認識に限定されている感じがする。其の二になると、その傾向はもっと強くなり自分自身と家族の描写になっていて、行動が時代の大きなうねりや国家権力という外から寄せてくる強大な力に対する絶望的な抵抗であり、その結末も衝撃的であるのに対して、この「辞世」の詩二首の内容は、内向きとでもいってよいほど、時代や権力に対する感情は抑制されている。憂憤や抗議の激白よりも、嘆願の実質的達成を求めたのであろう。

其一	其の一
古来忠孝幾人全	古来　忠孝　幾人が全からん
憂国思家已五年	国を憂い家を思いて已に五年

一死猶期存社稷　　一死猶お期す　社稷の存するを
高堂専頼弟兄賢　　高堂専ら頼れ　弟兄の賢

むかしから君主に対する忠と親に対する孝という二つの道をまっとうした人は何人いるだろうか。わたしは、国を憂い家を思って福州に渡ってからすでに五年になる。いっこうに好転しない琉球救国の現状を打開し、琉球国の存続という大義のため命をかけよう。ご両親におかれては、どうか賢明な兄弟に頼られたい。

其二　　其の二
廿年定省半違親　　二十年定省せしも　半ばにして親に違う
自認乾坤一罪人　　自ら認む　乾坤の一罪人たるを
老涙児憶雙白髪　　老は児を憶いて涙し　双白髪ならん
又聞凶耗更傷神　　又凶耗を聞かば更に神を傷らん

二十年間（十五歳前後で元服してから、ここまでおよそ二十年）孝行を尽くしてきたが、志なかばでご両親をうらぎることになった。みずから認めます、天下の大罪人であることを。年老いたご両親は子供（林世功のこと）のことを心配して涙し、二人とも白髪になっているだろうに、ここでまた、死亡の報せを受けたら、心がつぶれてしまうだろう（この親不幸をお許し下さい）。

琉球国の存続のために自らの一命を賭けた林世功の行動について、評価はさまざまに揺れている。まずその代表的なものとして、次のようなものが挙げられる。

太田朝敷は『沖縄県政五十年』の中で、「頑固党中に県の利害など眼中に置かず、盲目的に支那に信頼するもの（黒党――筆者注）と、単に支那の国力を過信した結果として、後日彼の忌諱に触れるのを恐れて向背を決し兼ねた消極的のもの（白党――筆者注））とがあった」としたうえで、頑固派と開化派との対立、頑固派の中の黒白の対立について述べたあと、「県民をしてかく時代に逆行せしめたのには、唯一明かな原因がある。即ち支那の国力を過大視した結果に外ならぬのである」と、厳しい評価をしている。注7

太田の評価は、直接林世功の行動についてのものではないが、彼と行動をともにしたいわゆる頑固派に関わる評価であり、当然林世功に対する評価を含むものとみなして良いものと思われる。

次に伊波普猷は、「事の成否はともあれ、林氏の自殺は、同時代の人に大なるショックを与へ、官生新垣の名は、児童走卒も能く之を口にしたのだが、日本思想の浸潤するにつれて、いつしか耳遠くなった。」注8

林世功の行動の意味については、深く立ち入った論評はせず、慎重な言い回しで性急な評価を避けている。事件の衝撃の大きさと、それが日本への同化が進むなかで忘れられていったことを述べるにとどめている。

仲原善忠は、「日本では、すでに徳川氏を頂点とした幕藩体制はたおれ、封建制度を精算し、絶対君主制が進行中である。琉球王国の解体の日程が進行中であるのに、士族および同階級の久米村人の大部分は反対運動に熱中していた。林世功は、反対運動のため、九年福州に走り、北京政府に願書を出した。十二年、いよいよ廃藩置県が実施せられた報を受けるや、北京に急行し、ついで事の成りがたきを知るや自刃して死んだ。年四十歳彼の純情は愛すべきものがあるかも知れないが時勢に対する無智には呆れる外ない。」注9

これは、きわめて厳しい評価である。

東恩納寛惇は、「国久しく武事を廢し、專ら事大の禮を修め、安寧を彌縫するを以て国是としたるを以て、士気爲に衰へ、安逸を偸み、小康を娯しむ風を作し、其節に国家の爲に、殉ずる如きに至りては殆んど遂に望むべからず。（中略）節義久しく亡びて、偸生之れ事とし其の争ふ者は、利己にして、其の墨守する所は因襲のみ、具眼達識の士遂に在る事莫きを以てなり。斯の時に当りて、独り使命の責を引き、加之其の正副使節等晏如として百年河清を竢てる時に當り、一裨役の身を以て大義名分の爲に死す。噫林氏世功は、琉末一人の志士なる夫。暫其の成敗を論ず可からざるなり。然れども若し、其の名分の根本を誤ると云はば噫又何をか謂はむや。」注10

太田・仲原の評価は、先に指摘したとおり否定的であるが、伊波・東恩納は、林世功の主張である琉球国の再興という論点や、その大義のために自らの生命を犠牲にした行動のあり方については、その是非を論ずるよりも、琉球国の家臣としての節義に生きた行動そのものを、「琉末の一人の志士」として哀惜する傾向の強い評価と言える。

そして、最近は１９７０年代の沖縄返還を前にして、復帰運動の内実を問う動きのなかで、林世功の行動と思想についてその意味を再吟味する研究が進んでいる。たとえば、新川明は琉球王国末期の頑固党と開明派の対立、頑固党の中の白・黒の対立について、これを日本国家への同化と反国家との対立を軸にして論じている。注11

比屋根照夫は、日本の自由民権運動を担った思想家や政治家たちが、琉球王国末期の状況についてどの様に認識しているかを分析しつつ、林世功らの思想と行動を、広くアジアの被抑圧民族の抵抗運動との関わりの中でとらえようとする斬新な試みを展開している。注12

西里喜行は、林世功らが総理衙門に提出した請願書の発掘と紹介を精力的に進めながら、当時の中国のジャーナリズムが彼らの行動をどのように見ていたか、報道機関の記事を丹念に調べて、同時代の周辺の国々の受け止め方を分析している。注13　おそらく今後も、林世功をはじめとする琉球救国運動に参加した人たちの行動と思想については、繰り返し研究され続けるだろう。

それにしても、留学期はもちろん、命を賭けての請願書や「辞世の詩」にしても、その詩文に見える林世功は、落ち着いて穏やかである。その激しい行動とはうらはらに、詩文においては激烈な感情の表出や日本・清国に対する抗議などは、抑制されている。

こうして見てくると、悲憤慷慨の気が格別強かったようでもないし、性格的には、むしろその逆であったように見える。すくなくとも、詩文における彼は穏やかな人格の持ち主であった。だとすると、このような青年を死へと追いやったものが、問われなければならない。言うまでもなく、明治新政府の琉球政策に対し、形はともあれ命を賭けて抵抗した姿勢は、時代をこえて人々の関心を集めずにはいない。日本に対する同化や一体化、その延長線上にある日本人意識というものに呑みこまれず、むしろそれを拒否して沖縄人としての意識と誇りを大切にし、沖縄の自立を希求する人々にとっては、沖縄の精神のシンボルとして、受け継がれていくことだろう。

4．幸地朝常（向徳宏）の位牌発見

幸地朝常は、幸地朝則さんの祖父であることは先に述べた。崎原貢氏の『がじまるの集い』の中にある「幸地朝則」の項目の記録によれば、朝常には男の子が三人あった。朝則さんのお父さんは、末の三男の朝珍といった。朝珍の兄の朝瑞は、尚家経営の丸一洋行の大阪支店長として活躍してい

たが、朝珍は、闘鶏などの遊びにふけっていた。そんな頃、当時盛んだったハワイ移民にひかれるようになり、１９０６年（明治３９年）２９歳でハワイに渡った。奥さんと８歳の朝則さんを残して単身での旅立ちだった。

しかし、ハワイに渡ってからも、畑仕事がつづかず、賭事などで遊びまわるようになり、家との連絡も途絶え、家では泣く泣く位牌を作り、仏壇にまつっていた。ところが、１９１３年（大正２年）、マウイ島のカフルイで漁業をしていた松田という人が帰省し、幸地家をたずねてきて、お母さんのお茶代にして下さいという伝言と共に５ドルもってきた。朝珍の母も驚くやら喜ぶやらで、さっそく位牌を焼き捨てたという。

その頃、朝則さんは大阪の叔父さんの経営する丸一洋行に勤めていた。ハワイへいって１０何年も音信不通で死んだものと諦めていた父が、マウイで達者でいると聞き、文通を始めた。

大阪に３年いた後、１７歳の時に東京に出た。そして２年後、１９１７年、１９歳の時にハワイへ来た。父がハワイで楽な生活をしていない事も心配だったし、８歳の時別れたままの父とも会いたかった。

２１歳の時、首里赤平出身でマウイ島ワイルクにいた千代（元翁長オミト）と結婚した。２男６女の子供に恵まれた。[注14]

話を朝珍さんの祖父朝常に戻そう。『沖縄大百科事典』には、次のように記されている。

「生没年未詳。清国在留脱清人の指導的人物の一人。位は親方。唐名は向徳宏。１８７６年（明治９）、浦添朝昭の命をうけ、琉球救国の国事に従事するため林世功、蔡大鼎らをしたがえ運天港から脱清。以後、福建・天津・北京と中国各地を奔走。ついに清国で客死。とくに、福建省琉球館（柔遠駅）を根城に清国政府の動向を把握、在留脱清人たちにさまざまな戦略を指示、琉球との連絡につとめた。幸地らのうごきは明治政府も重視しており、治安当局はその行方の探索に力をそそいでいる。また自由民権派の新聞にも幸地らの動向が報じられるなど、その動静はおりからの日清関係に微妙な影響を与えた。８４年８月には長男朝端も父の後を追い脱清、父子そろっての脱清の事例となった。８７年、幸地らが清国政府に提出した「嘆願書」には、琉球処分による「琉球国ノ惨遭国亡ヒ家破ル」の状況が述べられ、「琉球国ノ家々戸々惨然トシテ禍ニ遇」うさまが哀切の文章でつづられている。清国服に身をかため、頭髪も清国風に結い上げ、中国大陸を転々とした脱清亡命のリーダー幸地の以後の足どりは不明（比屋根照夫）」

東恩納寛惇の『尚泰侯実録』[注15] によれば、幸地親方朝常は、脱清の前年１８７５年（明治８年）２月、三司官池城親方、与那原親方らと共に上京した。内務省で、松田道之大政大臣から、先の台湾征伐の顛末と、琉球保護のため熊本鎮台分営を那覇に設立する件等について内命を受ける。４月に池城、与那原、幸地、津波古の４名は、内務省に出頭し、分営設立の件について、固くこれを拒む。松田はさらに追い打ちをかけるかのように、中国への進貢、請封の禁止、明治年号の使用、留学生の派遣の件等を命じた。

国王尚泰をはじめ上下の官員はもちろん、国内は驚愕し、動揺と不安の暗雲に覆われた。松田は内務省の伊知地貞馨らを同行して、幸地ら琉球の役人と共に那覇着。首里城に上って、直接尚泰に中国への進貢・請冊の禁止を含む命令を通達した。

琉球では、１３７２年明の洪武年間から数えて、およそ五百年の中国との外交関係が断絶させられることを何としてでも避けたかった。１８７６年（明治９年）は、進貢の年に当たっているが、明治政府の禁令によって派遣中止の危機的状況に追い込まれていた。このことを清国政府に説明し、

同時に事態の打開のために清国政府の力添えが欲しかった。幸地朝常らが、国王の密書を携えて琉球を脱出したのは、亡国の危機に追い詰められた琉球が、生き延びるための道を求めた窮余の策であった。

幸地親方朝常（向徳宏）は、「琉球処分」という時代の荒波と抗い、その奔流に押し流され、ある意味では琉球国の滅亡と運命を共にした人物であった。おそらく、その数奇な運命のせいでもあろう。国王の義理の兄弟に当たる高貴な出自でありながら、その経歴は生没年を含めて分からないことが多い。

ハワイのマウイ島には、沖縄県人会によって沖縄文化センターが建てられている。舞台を備えた集会場として、また、ハワイの沖縄移民の生活資料館として、多くの貴重な資料を備えている。

２０００年夏、マウイ島で沖縄関係資料の調査と移民に対するインタビュー調査をおこなった。その中で、同島パイア町郊外にお寺があり、そこに与那原家の位牌が保存されていると聞かされた。われわれは、是非見たいということで、そのお寺を訪ねた。

そのお寺は、パイア町の郊外、海岸の景勝地に建っている。「臨済宗妙心寺派開教院」（略して開教院）というお寺である。１９３２年、沖縄から来た臨済僧岡本南針和尚が開山僧となっている。移民時代に建てられたものとしては、米国唯一の臨済宗寺院だという。マウイ島在住の沖縄系社会が、中心となって支えている。境内には共同の納骨堂があるが、一目で沖縄出身とわかる名字が多い。注16

１９９０年以来、このお寺の住職をしておられる山口良三和尚に導かれて、二階の本堂に入り、位牌を拝した。位牌は与那原家のものではなく、幸地家のものであった。この位牌が開教院に入ったのは、最近のことである。

マウイの沖縄文化センターを事実上運営し、資料の整理や管理をしておられたロイ・与那原さんが、保存しておられたものである。ロイさんが亡くなられた後、文化センターのロイさんの遺品を整理している過程で、この位牌の存在が明らかになったという。沖縄文化センターと県人会では、その扱いに苦慮していたというのが実情であった。幸地家の関係者が引き取るべきだ、郷里の沖縄に帰すべきだ、このままセンターで保存すべきだ、と意見はいろいろ出たが、結論に至らなかった。

そこで、マウイの県人会では、沖縄県人会と関係の深い開教院にあずかってもらうことにした。山口住職は、住職になられて以来、沖縄の歴史や文化について勉強しておられ、幸地朝常が如何なる人物かについても良く知っておられる。当然喜んで預かることにした。「きっと、沖縄からこの人物について調べに来る人がいると信じていた」というその顔は、われわれに対する歓迎の喜びにあふれていた。

幸地家の位牌には、はっきりと幸地朝常の名前があった。お経をあげてもらったあと、位牌を写真に撮らせてもらった。これによって、従来わからなかった幸地朝常の経歴に関する謎が解けたことがある。もっとも大きな収穫は、その生没年が判ったことである。位牌の一枚の札には、三行に分けて次のように記されている。「光緒十七辛卯年四月十七日卒壽四十九／幸地親方／朝常」。

「光緒十七辛卯年」は、１８９１年（明治２３年）である。日清戦争の３年前、謝花昇が東京での勉強を終えて帰郷した年であり、その翌年には奈良原繁が知事に就任している。享年が４９歳（数え年である）ということは、１８４３年（尚育九年・道光二十三年）の生まれということになる。

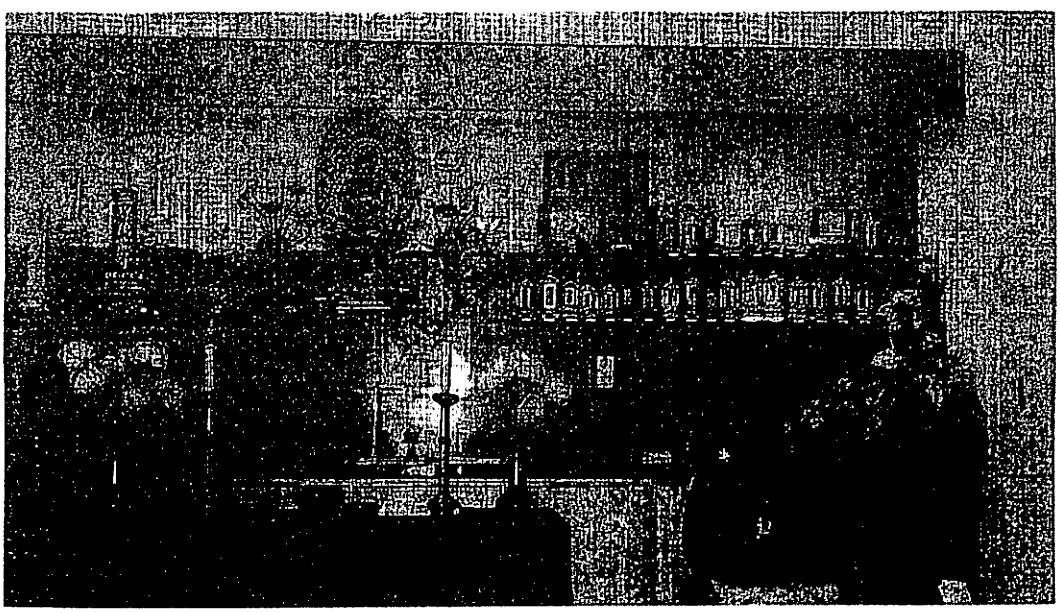
この位牌によって、従来未詳とされてきた生卒年が明らかになったわけだ。ただ、依然として残っ

ている謎もある。何処で亡くなったのか。死因は何か。何処に葬られたか。そもそも、この位牌は、誰がハワイに持ってきたのか。大阪におられた長兄の朝端さんのもとではなく、どうしてハワイに来ることになったのか等についてであるが、そのことについては、幸地家の関係者による証言を待つほかはない。われわれとしては、今回の調査で幸地親方朝常の生没年を明らかにする上で重要な資料となる発見をしたことを幸運としなければならない。[写真３、４、５、６参照]

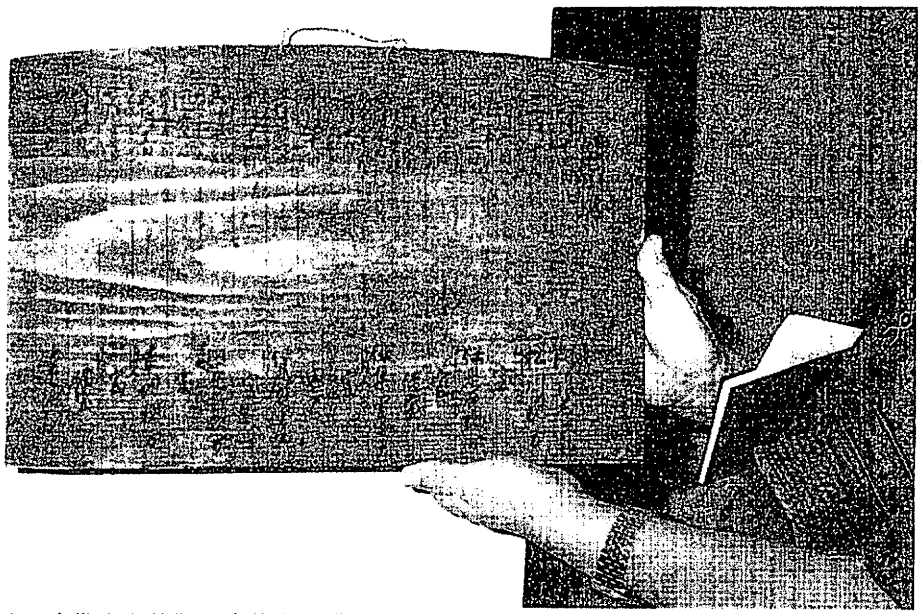
今回の調査では、マウイ島の沖縄文化センターで、ロイ・与那原（与那原良永）さんの収拾した資料を参観させていただいた。その中には、与那原良宣さん（良永の父）の旅券のコピー等貴重なものがある。与那原家は、琉球王国時代に十名前後の三司官を輩出した首里の有力士族である。

幸地朝常と一緒に東京に行った与那原親方良傑は、琉球処分期の三司官として、明治政府との交渉に当たった人物である。その父親の良恭もやはり三司官であった。

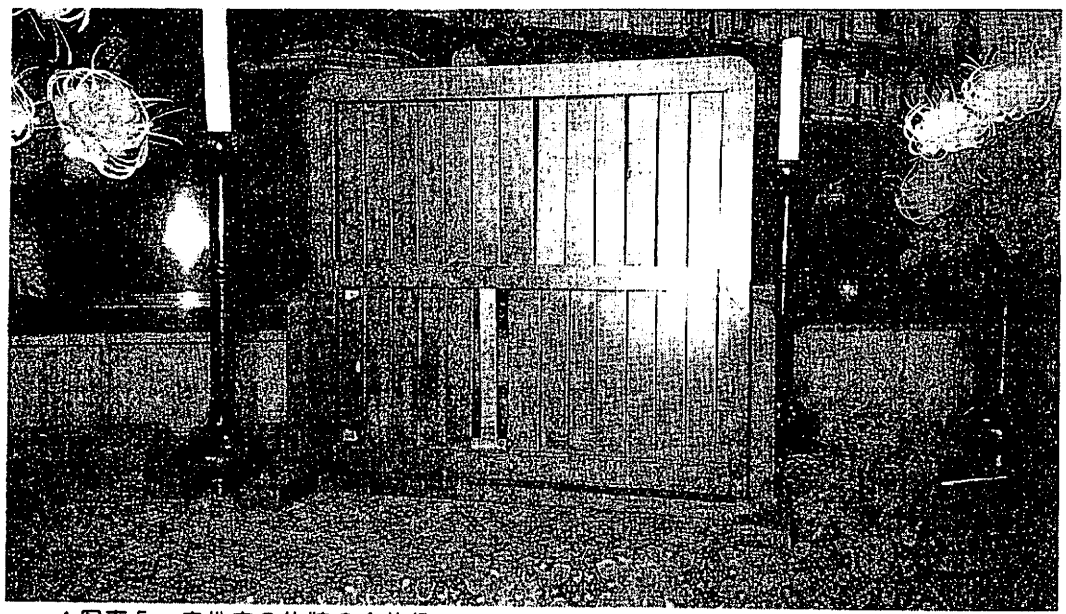
琉球随一の門閥と言って過言ではない。沖縄では現在、その「家譜」を見ることができない。もしかしたら、ハワイにという期待を抱いている研究者は、今でも多い。しかし、まだ発見されていない。与那原家についての羨望と期待は、尽きないものがある。今後、ハワイにおられる関係者のご協力を得ながら、聞き取り調査を重ねていくべきだろう。琉球（沖縄）史上における与那原家の存在が絶大なものであることは、誰もが認めるところである。



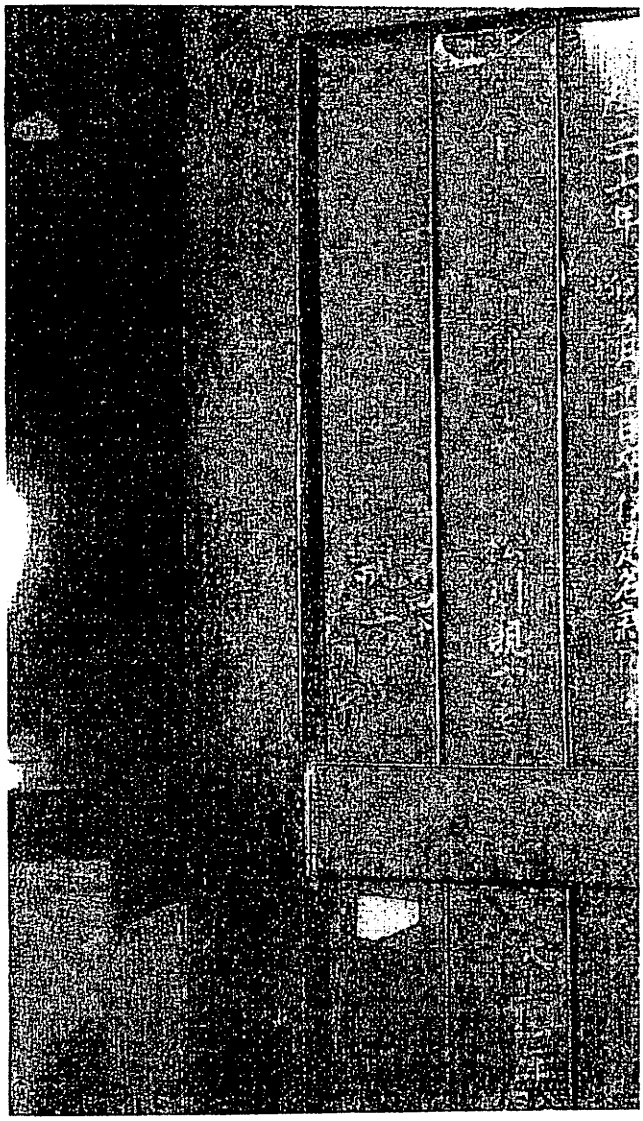
▲写真３　開教院に祀られている琉球人の位牌



▲写真 4　幸地家の位牌の人物を記録した木札



▲写真 5　幸地家の位牌の全体像



◀写真6　幸地親方朝常の部分の拡大

【注】

(1)ハワイ大学ホーレー文庫の整理については、仲原善忠の「京都における沖縄文化探見」(『仲原善忠全集』第1巻　沖縄タイムス１９７７年)、同「このごろのハワイ」(『前掲書』第4巻)。比嘉春潮「１９６４年の初夢———沖縄文献の収集運動を提言」(『比嘉春潮全集』第3巻　沖縄タイムス　１９７１年)等を参照。

②ホーレー文庫所蔵文献に関する紹介は、崎原正子「ハワイ大学の琉球研究資料」「季刊沖縄」創刊号　那覇出版(昭和５４年)。横山學「フランク・ホーレーと琉球研究」『琉球・沖縄——その歴史と日本史像』地方史研究協議会編　雄山閣発行(昭和６２年)等を参考にした。

③崎原貢氏による同書は、１９８０年　がじまる会発行　ハワイ報知社印刷である。

④「脱清人」とは、明治政府が付けた呼称である。しかし、これは本来「脱琉渡清人」とすべきである。このことについては、比屋根照夫氏に詳しい考証がある。比屋根照夫『自由民権思想と沖縄』研文出版(１９８２年)および同氏『近代沖縄の精神史』社会評論社(１９８６年9月)等参照。

⑤『沖縄県史』第十三巻所収の「脱清人明細表」等参照。

⑥林世功の嘆願書については、西里喜行氏の詳細な論文がある。ここに引用した読下し文も、同氏

の読みによる。西里喜行「琉球救国請願書集成（１）」『琉球大学教育学部紀要第３０集』（１９８７年）参照。

⑦太田朝敷『沖縄県政五十年』『太田朝敷全集』上巻（１９９３年）』１５６～１５７ページ。

⑧伊波普猷『沖縄歴史物語』『伊波普猷全集』平凡社（昭和四九年六月）４４２～４４３ページ参照。

⑨仲原善忠　同①　５６２ページ。

⑩東恩納寛惇『尚泰侯実録』『東恩納寛惇全集２』第一書房（昭和５３年８月）４４１ページ参照。

⑪新川明『琉球処分前後』上　朝日選書（１９８１年３月）参照。

⑫比屋根照夫『アジアへの架橋』沖縄タイムス社（１９９４年１０月）参照。

⑬西里喜行「琉臣殉義考―林世功の自刃とその周辺－」参照。

⑭崎原貢『がじまるの集い　沖縄系ハワイ移民先達の話集』がじまる会発行（１９８０年１０月）１５４ページ参照。

⑮東恩納寛惇『前掲書』同⑩参照。

⑯山口良三「臨済宗妙心寺派開教院略史」『臨済禅花園妙心寺布哇開教院』（１９９０年１１月）